



真の国際化とは自分の国を知ること。
茶道を通じて、人生の師を見つけ、
ビジネスパーソンとしての教養を磨こう。

text / 渡辺幸裕 + photographs by 稲垣純也

炭がくべられた炉の上に置かれた釜。そこから静かに立ち上る湯気。抹茶が入った茶碗に注がれる湯。丁寧に茶を点てる茶筌の音――。

茶を点でるところから、振る舞われるその時まで、主人の所作はどれも美しい。

「茶道とは一つひとつの型を地道に習い、身につけていく稽古事。続けることで所作に美しさが生まれ、その過程で自らの魂も磨かれていく」と宗偏流家元の山田宗偏さんは語る。

美術品を愛で、客人を招き、心を込めてもてなすことを目的とした茶の湯は、室町中期から安土桃山時代にかけて確立していった。他の伝統芸能と同様に、明治期には一時衰退したが、点前（てまえ）という型を学ぶ茶道が生まれ、これが稽古事として広がっていったのは、昭和初期から女学校教育に取り入れられたことがきっかけであった。

長い歴史を持つ茶道だが、最近はクルルジャパンの波に乗り、格好よさや美しさがことさらに取り上げられてきた。しかし、「形だけ茶道に触れても何も身につきませんよ」と山田さんは茶道の厳しさを語る。所作の美しさは長年にわたる稽古の積み重ねによって、はじめて生まれるものであり、ここで築かれる師弟関係にこそ、茶道の稽古の本質がある。

師として、弟子としての本分をそれぞれがわきまえ、授け、授けられる関係を築く。ここには単なる学習を超えた、日本人がこれまで大切にしてきた謙虚さや人への思いやりの心を身につける場がある。

折に触れ、師のところに、風呂敷に包んだ手土産を持参し、季節の挨拶をする。稽古の場では、茶を点て振る舞うこと以外にも日本人本来の細やかな心遣いや礼法、コミュニケーションの術を学び取ることができる。

今号で「日本かぶれ」は最終回を迎えるが、これまでご紹介してきたテーマは42に上る。これらがすべてではないが、忙しいビジネスパーソンこそ、自国に伝わる文化を学び、本物の教養を磨いてほしい。長い間、ご愛読いただき誠にありがとうございました。



露地

茶会に招かれた客人は、直接茶室に通されるわけではない。まずは、座敷などに通され、そこから庭へ出て、飛び石を配した露地を抜け、小さな門をくぐって茶室にたどり着く。



茶室

茶室には床の間がしつらえられ、そこには心の戒めとなる禅語の書、季節感を表現する絵が掛けられる。床の間にある床柱は、神が降りてくる依代として古来意識されたものであり、床には神が宿り、神を中心として、人間が平等な関係で、抹茶・茶道具を媒介としてコミュニケーションを取るといったイメージを持っていた。お湯を沸かすための炉は、民家の囲炉裏を茶室用に改良したもので、市中にいなながら、もの寂びた山居を味わえるよう作られている。



薄茶の頂き方

茶道とは

茶道とは“点前”という型を学ぶものである。稽古事として、点前という型とその点前をするための道具を通し、丁寧な物の扱い、優美な所作、季節感と物語性が身についていく。茶会は稽古の一環であり、この中でおもてなしについて学んでいくことができる。

宗 流 Sohenryu



山田宗備さん
宗・流家元

宗・流ホームページ
http://www.sohenryu.com
著書に「宗・風—イップクイカガ」
(桐島ローランド氏と共著)、「宗・流」などがある。



Yukihiro Watanabe

ビジネス・コーディネーター。1950年生まれ。前職のサントリー宣伝部で、海外イベントを担当した時、自国文化についての知識のなさを痛感。2001年独立を機に日本文化超初心者会“和・倶楽部”を提唱、運営中。会のコンセプトは「日本人に生まれたことを喜びたい」。

写真：新聞雅士

今号で日本かぶれは最終回です。
なお、過去の連載記事は「日経ビジネスアソシエ・オンライン」に掲載しております。こちらをご覧ください。
http://nba.nikkeibp.co.jp

⑦ 飲み切る

抹茶の泡も残さぬように二口半で飲み切る。



⑧ 飲み口を拭う

飲み終わったら、飲み口を親指と人差し指で拭う。



⑨ 拭った指を懐紙で淨める

飲み口を拭いた時に、指についた茶を懐の懐紙で拭う。



⑩ 正面を直す

茶碗の正面が亭主に向くように茶碗を回す。



⑪ 茶碗を返す

絵柄が主人の方に向くように茶碗を置く。



① 茶碗を取る

主人から勧められた茶を右手で取る。



② 掌に載せる

茶碗を左掌にのせる。右手を添えて丁寧扱う。



③ 一礼する

茶を点てた人に感謝の心を表す。



④ 茶碗を回す

茶碗の正面に口をつけるのを避けるため、時計回りに45度くらい回す。



⑤ 一服頂く

まず、一服頂く。



⑥ 「結構でございます」

亭主に感謝の気持ちを表す。

